Tea Room（ティールーム）

デジタル・ヒューマニティーズと思想史研究

壽里（すさと）　竜（りゅう）
（経済学部教授）

デジタル・ヒューマニティーズとは，人文系の研究・教育にデジタル技術を用いる活動全般を指す。ここでは私の専門である社会思想史研究における新しい研究潮流と，そこで期待される図書館の役割について雑談的に書いてみたい。

私は経済学部に所属しているのだが，経済学は，社会科学の他の学問と比べて数理化が進んだ分野とされている。経済史においても，一次資料を統計処理したデータや，その時系列の変化を，地図上に異なる円の大きさで示すソフトなどが開発されている。他方，社会思想史では，従来の人文研究のスタイルに近い，個人単位のテキスト読解が今なお中心ではある。

とはいえ思想史研究も，ここ十数年で大きく様変わりした。私の専門である18世紀の英語圏のテキストについては，その大部分がデータベース化されている。さらに，15世紀中頃から19世紀以降にいたる英語圏の著作物と定期刊行物のデータベースを統合したGale Primary Sourcesが2017年に公開された。これらのデータベースは，これまでなら実際にテキストを読まなければ見つけられなかった単語への言及も瞬時に見つけることを可能にした。こうして，現在の社会思想史研究は，一見すると従来と同じに見えても，参照すべき一次・二次文献の範囲が格段に広がっているのである。

この傾向がさらに進み，今や個別のテキストを読まなくても済む研究すら登場している。一つはブック・ヒストリーと呼ばれる研究手法で，たとえば，ある国や地域の図書館の蔵書目録と貸し出し記録をデータ化し，ある本がどの図書館にいつ配架され，どの程度の頻度で貸し出されたかを明らかにすることで思想の伝播を数量的に把握する研究である。もう一つは，データ化されたテキストそのものを分析するという手法である。これは思想史研究ではないが，文学研究ではフランコ・モレッティ『遠読：〈世界文学システム〉への挑戦』（秋草俊一郎他訳，みすず書房，2016年）が有名だろう。「遠読（distant reading）」とは，従来の精読ではなく，むしろデータとして突き放すことで見えてくるものがある，という考えに基づいている。たとえば，モレッティは1740年～1850年の7,000もの英国小説の題名をデータ化して分析し，題名の長短の変化などをグラフ化しているのだが，そこには一定の傾向が見て取れるのである。

もちろん，これら新しい研究が手放しで受け入れられているわけではないし，新しい手法にコミットしている研究者たちもそのことには自覚的である。たとえば，ある本が頻繁に貸し出されていても，それが思想的に広く影響を及ぼしたとは即断できないだろう。したがって，こうした新しい手法による成果は，従来の研究にいかなる新たな知見を加えるか，ということによって評価されねばならない。手法の新しさだけで評価されるわけではないことは，伝統的な手法であるという理由だけで従来の研究が切り捨てられるわけではないのと同じである。

最後に，このような変化を受けて，図書館に期待される役割について述べておこう。電子データベースが大きな役割を果たすようになったからと言って，図書館の役割がそれを購入するだけになるわけではない。むしろ，各図書館が持っている貴重書や手稿類を従来どおりに保存するだけでなく，それらをデジタル化して公開することも求められるようになっている。それでも，データ化されたテキストでは分からない研究は残っていく。たとえば，手稿に使われている紙の透かしから，その執筆年代を推定することもある。その際にも，まずはどこに何の手稿が保管されているのか，という正確な情報が重要になってくるのだ。ところが，21世紀になってもなお，ある図書館に非常に重要な手稿が眠っていたことが明らかになることがある。そうした眠っている資料を発見・整理するにも，その調査のための人と時間が必要だろう。さらに，ますます世界中の研究者が日本の図書館を訪れるようにもなれば，海外の研究者の受け入れ体制も今まで以上に整えなければならない。このように，デジタル化時代の図書館には，これまで以上に大きな役割が求められ，期待されているのである。